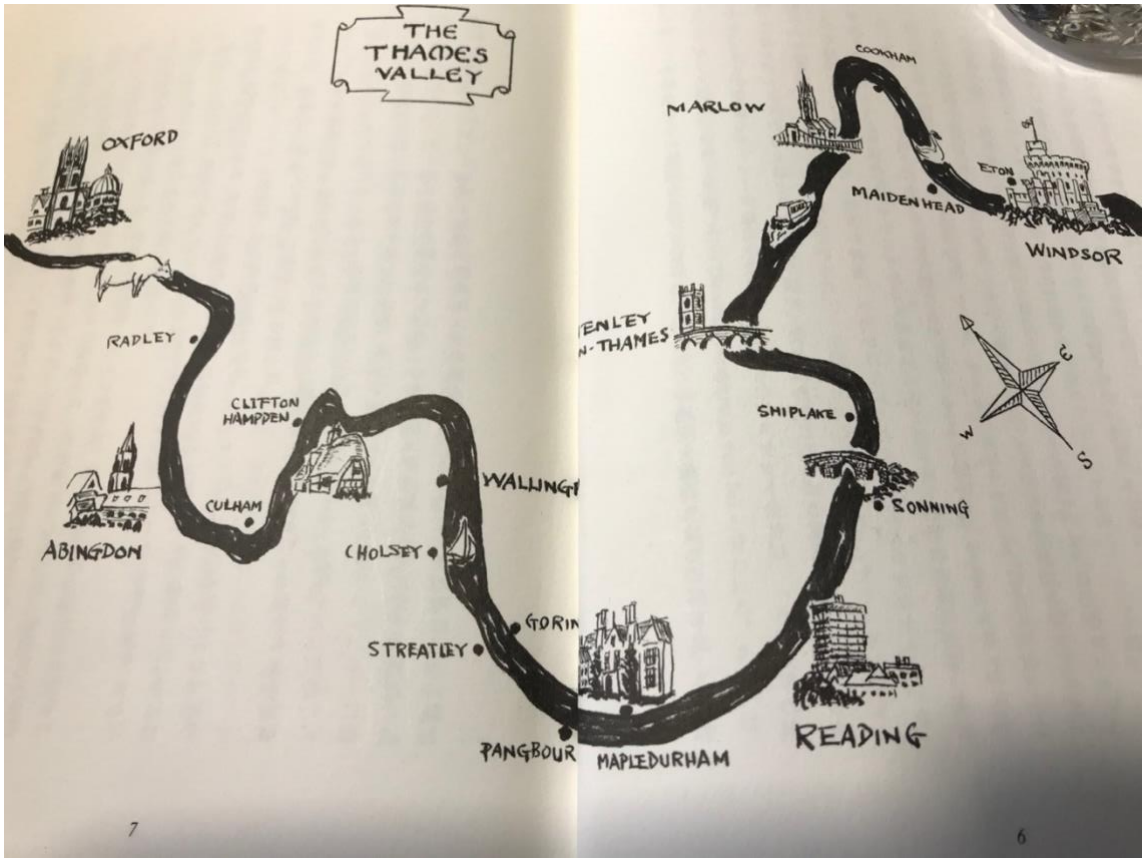
JLC 第 97 回研究発表会

第一部：2023 年 11 月 18 日（土）　第二部：2024 年　1 月 20 日（土）
日本近代文学館＋ZOOM　ハイブリッド形式

Walks along the Thames Path Downward from Oxford to Windsor

研究発表　岡本真弘人会員（挿絵も）



Thames [temz] < Tame, Tamesa (Celt.)

「テムズ川」の英語のスペリングは一見発音しにくそうであるが、カタカナ読みのままでいい。数少ないケルト系語の名残である。「暗い川」というような意味だったらしい。

Avon　(cf. afon)　Stratford-on-Avon :

同じケルト系でも「川」」そのものは avon（ウエールズ語では afon）という言い方も。

よって、ついでながら、このシェイクスピアの故郷の町は、

ford by which a Roman road crossed a river という意味である。

"Old Father Thames"

"the River"

と、古来より親しまれていたテムズ川を源流から海に流れ出すところまで "Source to Sea" と言うが、これは実は Cotswolds to the North Sea （コッツウォルズの森から北海へ）ということになる。

Footpath　< towpath

川沿いにできている散策コースは、かつて馬が懸命に筏の荷を牽引していた現場である。

20 世紀に入り、鉄道の敷設が進んでくると、馬の出番はなくなり、そのため馬のための towpath も荒れるがままとなっていった。

すると、パスを有効利用しようではないか、という運動が展開されるようになった。

Council for the protection of Rural England

River Thames Walk Committee

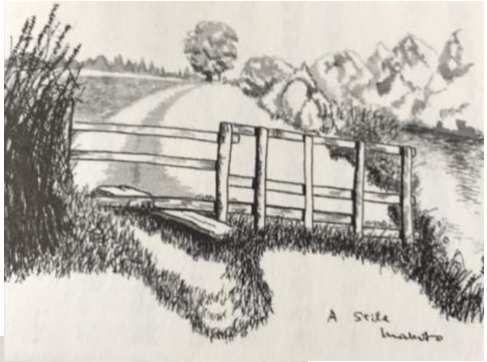
といった、“long distance recreational route” として活用しようという団体が生まれてきたわけである。

Ramblers' Association and River Thames Society という団体も生まれた。

英国での”rambler”とは a person who walks in the countryside for pleasure のこと。そして、National Trails が指定されることとなった。他の例としては Hadrian's Wall とも Pict's Wall (A.D.122) とも言われる「ハドリアヌスの長城」が有名である。これは中国の万里の長城の英国版と言えよう。

テムズ川の場合は、消滅しかかっていたところには 16 マイルのパスと三つの橋の増設も行い、1996 年に完成している。

かくして、かつて馬が活躍していた towpath は人間のための footpath となり、その歩く愉しみのコースは私有地にも設けられることとなった。これは法の下で保証されている。異なった所有者の牧場が隣り合わせであったりすると、人間だけが横断できる stile や kissing gate がコース上にある。



stile

kissing gate

また、そういう牧歌的なところでは、「シンメンタール」・「ホルシュタイン」・「アンガス」といった牛たちがテムズ川牛飲の図・三役そろい踏みといった構図でもお見受けすることがある。牛は優に 1 トンはあるような大型で威圧的に見えるが、そこはそれ草食獣とて、我々が近づいていくと、しょうがねぇなぁと、コースからゆったりとどいてくれるのだ。

<u>Oxford</u>

この名称は、つい大学を連想してしまうが、まず古くから町があったのである。女性尊重というか、雌尊重の風潮が当時あれば、大学の名称も Cowford 大学になっていたかもしれない。

この辺は浅瀬（ford）があり、牛を対岸へ渡らせやすかったのであろうか、牛の角を頭上に頂いた古代エジプトの豊穣の女神 Isis の名称で呼ばれることもある。現に、町の下流右岸には the Isis Tavern という緑の芝生の瀟洒なカフェがある。因みに、Isis の夫は Osiris。つい先ごろ帰還した「はやぶさ」の NASA 版の小惑星探査機は”Osiris Rex”と称していた。これは、Origins, Spectrum Interpretation, Resource Identification そして Security の頭文字であった由。

さて、大学の話である。

オックスフォード大学は 13 世紀に発足したと言われている。イタリアのボローニャやポルトガルのコインブラも同じころかららしい。なんとなく、大学とは？という定義もお伺いしたくなる話ではある。

ところで、オックスフォード大学という建物はない。三十いくつかの学寮(college)が大学を形成している。現天皇が皇太子でいらしたとき留学された大学名は Merton College, Oxford である。

鉄道が近くを通ることを嫌ったため、駅は少々離れた西側にある。従って、駅から東へ向かって歩くと、やがて街へ入っていくことになる。その街のたたずまいそのものが尖塔を有する学寮群であり、その中に商店も混じっている。

さて、そもそもの学寮形成は、教える者と教えを乞う者がギルドのように、親方と徒弟の関係で共同生活を行うということから始まった。その形態が聖職者や貴族から法人格を認められて学寮となったのであった。

各 college には 300 人ばかりの学生がいる。女子学生の存在はまだ歴史が短い。最初の学年は学寮内に居住すること、となっていて、自治組織がとられている。

古来、市民つまりは商人たちと学生との間には下宿代をきちんと払ってくれないとか、喧嘩も絶えなかった。“Town and Gown” とは、そのことを伝えている言い方である。

オックスフォード大学で一番知られている先生はルイス・キャロルではなかろうか。世界中の子供たちに親しまれている *Alice's Adventures in Wonderland* (1865) を書いているからである。彼は本名をまずラテン語化し、それをまた英語に転じてペンネームにしている。

Lewis Carroll < Ludovic Carolus < Charles Lutwidge Dodgson

彼自身、聖職者でありながら、吃音と内気な性格で説教壇に立つことはなかった。専門は数学の学者であった。時の女王ヴィクトリアが Alice の物語を甚く気に入り、「もっと他にお書きになったものも読みたい」と所望したところ、ドサッと数学の書物が送られてきたそうである。

Abingdon

この町は“one of the oldest towns in Britain”を標榜している。 昔、MG の事業所が存在していたので、スポーツカー好きには懐かしいところらしい。

Clifton Hampden

村の見ものは、テムズ川にかかっている名称が村と同じ優美な橋である。殊に、夕陽が当たっているときはその赤レンガが美しさを放つ。そして、それに劣らぬ美しさを放っているのが Barley Mow というパブで、“the best-known of all Thames pubs”と言われており、テムズ川沿いのパブは数多くあれども、美しさではこの右に出るものはない、ということになっている。確かに、さもありなんと思われるたたずまいである。一対の大きく湾曲した角材が白い漆喰の壁を保持して、地面から茅葺屋根の軒下まで伸びている。この造りは cruck construction timber-framed building と言われているもの。

Barley Mow

入り口に “Duck or Grouse”という掲示があり、2 種類の鳥に思えるが、実は「頭を下げないと後でぶつくさ言うことになるよ」ということ。建築は 1352 年。歴史的建造物の指定を受けている。

Wallingford

町は London と Wales を結ぶ古道にある。そういう街道筋に建っているのが The George というホテル。築 1518 年。「ホテル」でいいわけだけど、なんとなく「イン」と言いたくなる風情。

The George

ここを定宿にしていたのが Dick Turpin なる有名な追剥 (highwayman)であった。彼は司直の手が伸びてきそうになると、青色の牝馬である愛馬 Black Bess にサッと飛び乗り遁ずらするのが常であった。我が国の鼠小僧を連想させるところがある。庶民に人気があったらしいからである。他の地域のちょっとした古いお

宅でも、Dick Turpin が出入りしていた所なんだそうですよ、などと自慢げに言う奥さんにもお目にかかった。彼は 1739 年に York で処刑されている。

また、この宿屋には “Teardrop Room” という客室がある。「落涙の部屋」と言っておこうか。17 世紀の内乱の時期、当宿屋に美しい娘がいたのだが、その婚約者であった王党派の軍曹がバーでならず者に殺されてしまうという事件がおこったのであった。娘は半狂乱になり、自室に閉じこもってしまい、ついに部屋から出てくることはなかった。娘は暖炉の煤とあふれる涙を混ぜ、涙のしずくを壁いっぱいに描き続けたのであった。

筆者はこの事件を以前下宿の小母さんからもらっていた本で知っていたので、到着するとすぐこの部屋を見せてもらった。半狂乱のなせる涙を想像していたのだが、あに図らんや、灰色の均一の涙滴が白い壁に整然と並べて描かれてあり、意外に思ったものである。

宿泊客の中には、今でもこの部屋を所望してくる者もいるらしいのだが、夜中に寒けを覚えた、と言う人もいるとか。

Reading

Berkshire 州の州都であるこの都市をアメリカ人でも「リーディング」と仰る人がいる。遥か昔、9 世紀前後、各地の海岸地帯を荒らしまわっていた Viking と言われた北方民族の中で Readingas なる武将がこの地に駐屯したとされている。どうも町の名称は彼の名前に由来しているようだ。

“Berkshire born, Berkshire bred, strong in the arm, thick in the head”という俗謡があるようで（下宿の小母さんからの直伝)、バークシャー育ちは腕っぷしはいいが、おつむはすっきりしていないらしい。

Reading is famous for its three Bs.という言い方がある。あるいは、あった。

何といっても「ビスケット」である。Huntley and Palmer’s なるメーカーで、SONY の井深大と盛田昭夫、さらには HONDA の本田宗一郎と藤沢武夫のごとく、Huntley が製造し、Palmer が販売すること 1846 年以来であった。折しも時は英国の絶頂期。様々な意匠を凝らしたこのビスケットのブリキ缶が世界の僻地と思われるところでもお目にかかる仕儀となったようである。曰く、チベットに行った者は、まさしくこのビスケットとバター茶でもてなしを受けたとか、オーストラリアのアボリジニーの部落を訪ねた者は例のブリキ缶で装身具を作っているところを見た、とか。

現在、この会社は Nabisco に吸収されてしまった。しかし、市街地には広々とした Palmer’s Park があり、また、大学には Palmer’s Hall という立派な建物がある、というふうに地元への貢献がうかがえる。

2 番目は Beer (Simmons)であったが、Courage 社、さらに Tetley 社へと身売りすることに。

3 番目は球根の会社つまり Bulb (Sutton’s)であったが Devonshire へ移転してしまった。

この Reading の街については「監獄」に触れておかねばなるまい。つまり、”Reading Gaol “のことで、Oscar Wilde を想起される方もいるであろうからである。彼は”世紀末”と言われていた退廃的思想の代表格で、ロンドンの Regent Street にある Café Royal は、彼が Bernard Shaw, Yeats, Beardsley ら文士たちと、男色の相手 Douglas 卿とともに社交を愉しむ現場であった。当時男色は重罪。「レディングへ行く」こととなり、この華やかな流行作家は Regent Street へ出かけることは叶わぬこととなった。この期間彼の名前は C-33 に過ぎなかった。1900 年にフランスで死んでおり、没後 100 年の 2000 年には故郷アイルランドで記念切手が売り出されている。

Henley-on-Thames

Henley は Royal Regatta が開催される街である。この異国風の “regatta” なる語はイタリア語由来で、1851 年に Royal を冠してのボートレースが始まっている。毎年 7 月に 5 日間にわたって行われ、ウインブルドンのテニス、チェルシーのフラワーショウ、アスコットの競馬とともに初夏の風物詩となっている。

期間中は Steward と称する、出場経験者たちが Stewards’ Enclosure というゴール地点のテントで運営の活動する。男は navy blue のブレザー着用、女性のスカートはひざ下まであること、などと決まりがあり、いささか特権的である。「私も運営のお手伝いをしてみたい」と言っても、誰もがなれるわけではないらしい。

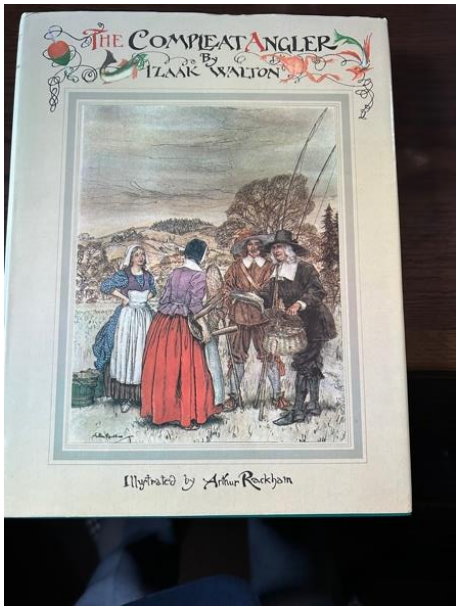
例のオックスフォード大とケンブリッジ大との伝統のボートレースもこの地で 1829 年に始まったのであるが、現在はロンドン近くに会場を移している。

さすがボートの街と思わせられるのが River and Rowing Museum が河畔に建っていることである。古代ローマのガレー船の仕組みを筆頭に、「漕ぐ」ことに焦点を当てていることも面白いが、テムズと人々の生活との関りの歴史も紹介されていて興味深い。

Marlow

ロマン派の詩人 Shelley が住んでいたところである。彼の妻 Mary はここで例の *Frankenstein* を著わしている。しかし、何と言ってもこの地を愛した Izaak Walton に触れねばならない。彼は *The Compleat Angler, or the Contemplative Man's Recreation* （1653）を世に出しており、日本でも『釣魚大全』、例えば平田禿木訳（1936 年）、としてその随筆は知られている。静謐な田園生活、瞑想を尊ぶ思想が盛り込まれてあり、タイトルにもあるように、魚釣りだけの話ではない。ずしりとしたこの書の表紙を開け、さらに flyleaf をめくると、お忘れ召されるな、単なる釣りの話ではありませんぞ、釣りとは瞑想にもってこいの場なんですぞ、とばかりの、"the quietest and fittest place for contemplation"という marginal comments 付きで、こちらの心も洗われるような、喧騒を離れ緑滴る中で独り釣りをしつつ読書もしている、はたまた、瞑想もしているような人物が描かれている。

The Compleat Angler



The Quietest and Fittest Place for Contemplation

どうどうと流れる川を目の前にして、書名と同じ The Compleat Angler という純白の瀟洒な木造ホテルが建っている。入っていくと、著書の一節が額に収められてホールの壁にかかっているのが分かる。うむ、ちゃんと彼に敬意を表しているな、と納得する。

Maidenhead

Cliveden House がこの地では有名である。そもそもは Duke of Buckinghamshire が愛人のために建てたものであったが（1666）、アメリカ 1 の大金持ちの毛皮商人であった John Jacob Astor（1763-1848）の子孫が「アメリカは紳士の住むところに非ず」としてやって来ると（1890）、豪壮な館へと変貌を遂げた。そして、ここが"プロヒュウモ事件"（1961）の現場となり、"Britain's most notorious country house"と言われる仕儀となったのである。John Profumo は当時の陸軍大臣、そのお相手が Christine Keeler。ところが彼女は一方でソ連の海軍武官とも親しき関係であることが発覚、騒然となった。折しも、世界は冷戦真っ只中。例のキューバ危機はこの翌年のことである。重要な西側情報がソ連に流れたのではないか、と危惧されたのであった。プロヒュウモにこのコールガールを紹介した医師は自殺。プロヒュウモは偽証の疑いで結局辞任。イギリス政界は大揺れに揺れ、マクミラン内閣は倒れた。

ちょうど 2000 年であったか、在英中の折、たまたま何気なく見た BBC で、あるお婆さんがインタビューを受けていた。見ているうちに「ア、Christine Keeler だ！」と分かった。「容色衰えず」とは言い難く、すっかりキーラー婆さんになっていた。

現在、Cliveden House はナショナルトラストの管理にあり、宿泊可能である。

Windsor

Windsor の街とは、テムズ川がこの辺で曲がっている（wind）ところからこの名前になったらしい。William “the Conqueror” （1066）がロンドン西方を固めるべく、この小高い天然の要害の地に木造の砦を築いたのがウィンザー城の始まりである。その後、石造りとなり増築に増築を重ね、現在は巨大な城となっている。

現在の王室の名称は「ウィンザー朝」。 House of Windsor となったのは 1917 年のことで、それまでは House of Saxen-Coburg-Gotha と名乗っていた。ヴィクトリア女王の夫君アルバート公がドイツの出身であったからである。しかし、第一次世界大戦で交戦国どうしとなり、これはまずいと、王室の名称を上記のようにしたのであった。その時の王は George v で、故エリザベス女王の祖父。昭和天皇が皇太子時代、英国訪問をされた際には王から丁寧なおもてなしを受けたことが知られている。

さて、そのウィンザー城が火災に見舞われたのが 1992 年。 城北東部の Chester Tower の礼拝堂から出火したとされている。なんでも、祭壇付近のカーテンがスポットライトの熱で発火したらしいのだ。この年には娘や息子の離婚騒ぎ、さらにはチャールズのダイアナとの不仲が暴露され、エリザベス女王は年末恒例のクリスマス談話に際し、“Annus Horribilis” 「大変な年でした」とやつれたような顔で述べておられたのが痛々しかった。

この彼女のラテン語の言い方は, 17 世紀の詩人 John Dryden の発した言い方 “Annus Mirabilis” （「驚異の年」）を参考にしているようである。ドライデンは The Great Fire of London（ロンドン大火 1666）を乗り切ったロンドン市民を称えてこの表現を用いたのであった。パン屋から出火したとされるこの大火で、かのセントポール大聖堂も消失。その再建に取り組んだのが建築家 Christopher Wren（1632-1723）であった。彼が 34 歳のとき礎石が据えられ、その 36 年後に聖堂は完成した。ウィンザー城西側に彼の住居が歴史的建造物として保存されている。その説明文には次の台詞も記されている。彼が寸暇を惜しんで聖堂の再建に取り組んでいた様子がうかがえる。

“I’m going to dine with some men, if someone calls…
Say I’m designing St.Paul’s.”

Eton

“Buy the bun in Windsor, go over the bridge and Eton.” という言い方があるそうで（これまた下宿の小母さんからの直伝）、文末の Eton は”eat’em”と掛けてある。成程、歩行者専用のテムズ川にかかっている橋を北側に渡れば、そこはすぐに Eton の街である。そしてパブリックスクールで有名なイートン校の校舎群に入って行くことになる。創立は 1440 年、寄宿制の中等レベルの学校であるが、Eton College と言われている。上流・富裕階層の子弟、高額な授業料、基本財産からの収益、さらに寄付によって学校は運営されている。イギリス社会の「階級」を意識させられる、そういう現場の一つとも言えよう。

とまれ、Eton College → Oxford University → Westminster、つまり、Eton を卒業して Oxford 大学へ、そして政界・財界の中枢であるロンドンの Westminster 地区へ乗り込んでいく。イギリスのエリート中のエリートのコースは、かつて物資輸送の大動脈であり、かつまた人々に長く親しまれてきたテムズ川に揃って面しており、この川が現在も英国にとって大きな存在であることがうかがえる。

完

We, Jokers
英語のジョークを楽しむ会
(Joke-Loving Club) 会報 第 97 号
発行日：2024 年 1 月 20 日
発行人：世話人代表　豊田一男
編集人：小澤正樹
発行元：英語のジョークを楽しむ会
問い合わせ先: j2d4vhb7@na.commufa.jp